

寅彦の情報あれこれ

【書籍紹介】

☆松下貢・早川美徳・井上智博・川島禎子著『寺田寅彦「線香花火」「金米糖」を読む』（2023年8月、窮理舎、税込2,530円）

寺田寅彦の作品を読むシリーズの第3弾。企画力と編集力に優れた本である。口絵には寅彦の書き込みがあるルクレティウス著『物の本質について』（英文）や金米糖・線香花火の実験カラー写真などが多数掲載されている。



ページを繰ると、まず寅彦の「備忘録」が見える。詳しい注釈があり、違った味わいで読むことができる。小見出しは、仰臥漫録／夏／涼味／向日葵／線香花火／金米糖／風呂の流し／調律師／芥川龍之介君／過去帳／猫の死／舞踊、となっている。

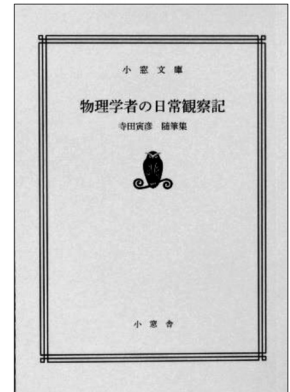
次に松下貢「寺田寅彦の科学に見られる先見性」、早川美徳「金米糖の研究をめぐって」、井上智博「線香花火の不思議と研究について」があり、各著者が専門分野の最新研究を踏まえて解説している。

圧巻というか白眉は川島禎子「寺田寅彦「備忘録」に見る未来への胚子」である。ここに至って、最初に「備忘録」の全部が掲載されている理由が分かる。「おわりに」には、「「備忘録」は、漱石の影響を通して、当時の科学や哲学とも共鳴した作品であるといえます。また本書のテーマである「線香花火」「金米糖」に関連して言えば、偶然性の高い連句的・音楽的構成や連想の自由な方向性、火花の躍動的なイメージが見出され、寅彦にとって科学と芸術が不可分のものであったと解せます。」とある。このまとめに至る詳細な説明が書かれているのであり、これほど寅彦に寄り添って、広く深く関連資料を読

み込んだ論考は今までに無かった。「備忘録」全体の流れ、漱石からの影響、土佐とのつながりなど、オリジナリティーに溢れている。とても全部は紹介しきれない。ぜひ手に取ってほしい本である。

☆『物理学者の日常観察記 寺田寅彦 随筆集』（2023年1月、小窓舎）

青空文庫で公開されている寺田寅彦の随筆を文庫化したもの。収録は、茶わんの湯、夏の小半日、藤の実、電車の混雑について、銀座アルプス、芝刈り、など12作品で、書名になっている



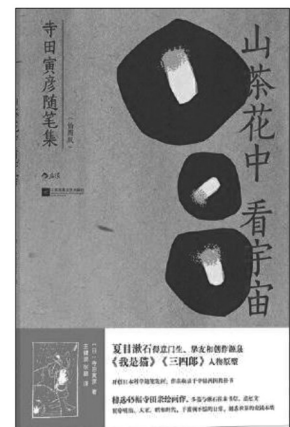
「観察」の様子が窺われる選定になっている。いろいろな出版社から寅彦の選集が出るのはとても嬉しいことである。

【中国で寺田寅彦随筆集の出版】

『山茶花中看宇宙 寺田寅彦随筆集』（2022年7月）

収録作品は、茶わんの湯、備忘録、津波と人間、科学者とあたま、団栗、コーヒー哲学序説、解かれた象、鉛をかじる虫、思出草、浮世絵の曲線、自画像、科学と文学、読書の今昔、先生への通信、夏日漱石先生の追憶。

挿図版というだけあって、寺田寅彦の絵画が口絵カラーで11点、本文中に白黒で34点収録され雰囲気を出している。見るだけでも楽しい本である。



【寺田寅彦記念室映像コーナー刷新】

高知県立文学館の寺田寅彦記念室だけで見ること

ができる、映像「寺田寅彦実験室」がリニューアルされている。操作がタッチパネル式となり、ジュニア世代に親しみがありそうだ。

友の会の会員であった上田寿さんや恒石直和さんが制作に協力した、以前の実験映像の内容を踏襲し、資料の撮影など改めて行なって、非常に見やすくなっている。内容は、渦巻きの実験、地滑りの実験、割れ目と生命、の3編でそれぞれ約4分余り。

【高知県立文学館のHPで寅彦資料】

高知県立文学館のホームページの資料が充実している。

寺田寅彦の紹介では、多くの著書の書影と説明、高知市内のゆかりの地・地図と写真などが見える。また、妻・夏子が療養していた種崎から寅彦に出した手紙の複製写真と翻刻及び解説、寺田寅彦の自画像（B）複製写真と解説があり、出向かなくても様子がよく分かるようになっている。

【寺田寅彦の肖像写真】

国立国会図書館の電子展示会「近代日本人の肖像」で、寺田寅彦の肖像が紹介されている。これは近代日本の形成に影響のあった、1803～1914年生まれ約750名の肖像写真を通じて、人物の人となり、その歴史背景を感じ取ってもらうための企画のようである。

寅彦の写真は3葉あり、札幌市月寒で写されたものは昭和11年版全集第3巻の口絵写真である。これはあちこちで見かけるが、表情がよく再現されていて、嬉しそうに少しはにかんでいる、優しくなごやかな雰囲気が伝わってくる。昭和初期の印刷技術の高さが窺える。

【論文紹介】

川口喬吾「生物学と物理学のひびわれ—寺田寅彦の長い影」(『戦後日本の学知と想像力』2022年4月、吉田書店)

生物学と物理学について、最新の特色や寺田寅彦の影響が今も残っていることが総合的に分かり易く書かれている。

第1節で湯川秀樹が生物物理学者の大沢文夫に「生物は積み木細工ですね。」と言った意味を解説。第2節では寺田寅彦を「学問の境界領域を広げた人」として捉え、弟子も含めて随筆になっている科学論文を説明している。寺田が「一見当時の研究者界限に対する愚痴を言っているだけのようで、その文句が百年通用する内容になっているところがさすがである」としている。第3節では「キリンの斑論争」をたどり、新しい知見が出てくることにより理論が合わなくなることを説明している。第4節では朝永振一郎による「寺田さんの物理学は本流じゃない」という評価を紹介し、金平糖の角の数の決まり方など、まだ解明されていない現象をあげている。寺田の死後、量子化学の発展やDNAの構造解析、ヒトゲノムの全解読、遺伝子編集技術の確立などの進歩があったが、われわれ自身でもあるはずの生物は、いまだに「宇宙の怪異」として物理学者の前に立ちはだかっている、とまとめている。

【関東大震災から100年】

今年に関東大震災から100年、9月1日を中心に、多くの新聞のコラムや社説などで寺田寅彦が取り上げられた。また震災関連書籍で寺田の作品を含むアンソロジーが発刊された。一件だけ紹介する。

中日新聞(9月4日)

〈師の警句 普及に努め〉(中谷宇吉郎「天災は忘れた頃に 寅彦の言葉」)という大きな見出しで中谷と寺田を取り上げている。

「天災は…」の警句が寺田の著書にはなく、講演や講義で語った言葉を「雪博士」として知られる物理学者の中谷(石川県加賀市出身)が新聞や著書で紹介して普及に一役買った、として経過を詳しく書いている。また、災害時の「流言蜚語」に対する、科学者としてのあるべき態度を紹介している。